

## 強意副詞の脱語彙化とその後の展開： 強意から迅速への意味変化

小笠原 清香  
立教大学大学院

In the previous studies, intensifiers have been examples of lexical items that underwent the process of grammaticalization and delexicalization, but less attention has been paid to the meanings developed after delexicalization. This paper aims to trace the semantic change of *swithe* and *fast* that were used as intensifiers in OE and ME. Examining their functions as intensifiers with verbs, the study shows how these intensifiers, originally used in the sense of ‘strongly’ or ‘firmly’, changed their meaning to ‘rapidly’.

キーワード： 強意副詞・意味変化・文法化・脱語彙化

### 1. はじめに

本研究の目的は、小笠原（2013）をさらに発展させ、古英語期（OE）から中英語初期（EME）にかけて広く強意語として用いられた *swithe* と、中英語期（ME）において強意語として使用された *fast* の類似した意味変化のプロセスを実証的に検証することである。特に、これらの語彙が文法化し、さらに語彙化することを論証するために、動詞との共起に議論を拡張することが、有効であることを論じる。

一般に、強意副詞の意味変化については、具体的語彙から強意語への文法化および脱語彙化のプロセスが観察されてきたが（Sinclair 1992; Partington 1993; Lorenz 2002）、各語彙がその後に得た意味に着目されることはなかった。Méndez-Naya (2003) は、OE から ME にかけて強意語として広く普及した *swithe* の文法化を、*Helsinki Corpus of English Texts (HC)* を用いて分析している。主な対象は形容詞・副詞修飾の用例であり、この語が後に ME において発達させ現代英語にまで残った ‘rapidly/quickly’ の語義に関しては、“The meaning ‘quickly’, which was at the beginning clearly context-dependent, soon became inherent to the adverb” (Méndez-Naya 2003: 383) と述べるにとどまり、この具体的意味の発達は詳細に論じられていない。

現在では廃用となった語も含め、強意副詞の歴史的意味変化に焦点を当てると、本来

‘strongly, vigorously’などの強意的意味をもった副詞が、後に‘rapidly’という速度の意味を獲得する事象が観察される。<sup>1</sup> 例えば *wightly, quickly* は本来、「生き生きと」や「激しく」といった意味で用いられていたが、MEに「速く」という意味を派生させる。<sup>2</sup> また、*smartly* も本来は「激しく・鋭く」といった意味で動作動詞を修飾したが、14世紀初頭に「速く」という意味を発達させた。

本論考では、こうした強意副詞の中でも、OEからMEにかけて広範に用いられていた強意副詞 *swithe* と、MEにおいて一般的な強意語の一つであった *fast* の意味変化を取り上げる。共起動詞の分析を行うことで、これらの語彙の類似した意味変化のプロセスを具体的に論証する。*swithe* と *fast* が動詞修飾の用法から「迅速」の意味を発達させたという歴史的な事実から、強意語は「速く」という速度を表す語義へと意味が変化する特徴を持つことを論じる。

### 1.1. 強意副詞の定義

一般的に強意語の修飾対象は、形容詞・副詞に限定されることが多い (Partington 1993; Lorenz 2002)。しかし、統語的振る舞いによって強意語の機能を限定する見方がある一方で、Quirk et al. (1985) では、意味特質により強意語が捉えられており、ここでは強意語は、形容詞・副詞以外の文の構成要素に対しても修飾する機能を持ち、より広い語彙範疇を形成している。また、高低に関わらず程度を表すものを強意語とし、*emphasizers* (強調詞)、*amplifiers* (拡充詞)、*downtoners* (緩和詞) に大別している。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 速度の意味から強意が生まれる場合もある。Stern (1921) では主にOEからMEにおける「速く」という意味を持つ副詞について、それぞれ意味特質ごとに分類し、意味カテゴリーを提示している。本研究ではSternによっては明確に論じられなかった副詞の意味変化における強意と速さの関連性について考察している。

<sup>2</sup> *wightly* は「人」という意味の名詞 *wight* から派生し、*quickly* も本来は「生きている」という意味の形容詞 *quick* から副詞の意味が派生した。また、Stern (1975 [1931]) に始まり、現代ではTraugott and Dasher (2002: 67)、およびBybee et al. (1994: 269) においても、「速く」という速度の意味と「すぐに」という時間的近接の意味について、これらの意味は「速く」から「すぐに」へと一方向の発達を遂げるという見解を示しているが、こうした規則性を必ずしも史的実実は裏付けない。例えば *quickly* の通時的意味変化をみると、「すぐに」という時間的近接の意味を先に発達させ、1世紀ほど後に「速く」という物理的速度の意味が現れている。本論考では、Traugottらによる意味変化の単一方向性の議論について主に検討はしないが、「速く」と「すぐに」の意味発達については、両方の意味が同時に派生するケース、またはどちらかが先に発達するケースが見受けられ、決まった順序は観測されないという現状がある。

<sup>3</sup> Quirk et al. (1985) では *amplifiers* は *maximizers* (極大詞) と *boosters* (増幅詞)、*downtoners* は *approximators* (近似詞)、*compromisers* (妥協詞)、*diminishers* (減少詞)、*minimizers* (極小詞) といった下位区分を持つものとして定義されている。このように高低に関わらず程度を表すものはすべて強意語とみなす見解も多いが (Lorenz 2002, Quirk et al. 1985)、Klein (1998)、Biber et al. (1999) では強意語を程度の高さを表す語に限定している。

Méndez-Naya (2003) では、先行研究における強意語の修飾対象についての定義を総括すると以下のような表現は全て強意語に認定される資格を持つと述べている。

- (1) I *greatly* admire his paintings. (verb modifier)
- (2) The play was a *terrible* success. (noun modifier)
- (3) The article was *extremely* interesting. (adjective modifier)
- (4) He was driving *very* quickly. (adverb modifier)
- (5) He is *much* in favour of the US attack on Afghanistan. (PP modifier)

(Méndez-Naya 2003: 373)

Allerton (1987: 16) が、強意語というクラスは統語的にも意味的にも、その基盤が定まらないと述べているように、*very*, *too* などの形容詞・副詞修飾に限定した機能を持つ強意語は実際には限られており、*absolutely*, *entirely* など多くの強意副詞は形容詞・副詞のみならず動詞修飾の機能も持ち合わせる。動詞を修飾する程度副詞は、verb degree modifier (動詞の程度修飾語) などと呼ばれ、形容詞・副詞を修飾する強意語 (intensifier) とは異なる呼称が与えられることも多い。Allerton (1987) では、これらを “two subclasses of a single class” (1987: 18) として捉えている。

本稿では、程度の高さを示す語に対象を限定した上で、Allerton (1987) による強意語の区分に基づき、強意語という一つのクラスの下位区分として動詞修飾の機能を持つ強意語に目を向ける。また、動詞修飾の機能を果たす強意語に対しては、強意副詞という呼称を用いる。

## 1.2. 調査対象・方法

はじめに、*swithe* と *fast* の通時的意味変化を概観する。この二語が強意語として普及した後、語彙的意味として ‘rapidly’ などの「迅速」の意味を発達させたことを確認する。次に *OED*, *MED* および Mustanoja (1960) における強意副詞の説明を比較し、これまで強意語研究においては目を向けられてこなかった *fast* が、*ME* における強意副詞として認定される資格を持つことを確認する。*swithe* に関しては Méndez-Naya (2003) がその文法化の過程を、*HC* を用いた調査を行い詳細に示している。これにあわせて、*fast* の意味変化を *HC* の共起動詞の観察を通して分析する。また、量的分析と意味の同定の精度を補強する目的で、14 世紀後半、15 世紀後半、そして 16、17 世紀を代表する文学作品における共起動詞の分析を行う。

## 2. *swithe* と *fast* の通時的意味変化

### 2.1. *swithe* の意味変化

Table 1 を参照しながら、*swithe* の通時的意味変化を概観する。Table 1 は *OED* の初出例を時系列に並べたものである。<sup>4</sup> *swithe* の原義は ‘strongly, extremely, very much’ などであり、動作の強度を表した。1175 年頃では ‘quickly, immediately’ といった物理的速度の意味と時間的近接の意味の両義が発達している。また 1300 年以前から *as swithe as* というコロケーションが ‘as soon as’ の意味で使用されたことが *OED* の初出例から理解できる。

Table 1: *OED*, s.v. *swithe*

<i>Beowulf</i> -1398	† 1. Qualifying a finite verb or a participle: Strongly, forcibly; very greatly, very much, extremely, excessively; in superl. most, most especially.
971 -c1450	† 2. Qualifying an adj. or adv.: Excessively, extremely, very. <i>Obs.</i>
c1175 -1907	4. Quickly, without delay, forthwith, instantly, immediately, directly, at once. Also as int. = Quick! hence! away! Now <i>arch.</i> or <i>dial.</i>
c1205 -1892	3. At a rapid rate, very quickly, swiftly, rapidly. Now <i>arch.</i> or <i>dial.</i>
a1300 -a1420	4. † b. <i>as (als, also) swithe as (als swither)</i> , as soon as. <i>Obs.</i>

*HC* を用いた Méndez-Naya (2003) の調査では、OE から ME で *swithe* が degree modifier (程度修飾語) として使用されていると考えられる用例が 184 例あると報告されている。<sup>5</sup> 一方、(6) の用例のように、本来の ‘strongly, powerfully, violently’ の語義で用いられ、修飾する動詞 *fight* に対する manner adverb (様態副詞) として機能していると解釈できる用例も 70 例あることが示されている。<sup>6</sup>

<sup>4</sup> ここでの表記はすべて *OED* に準拠しているため、dagger (†) は *Obs.* 同様、廃用となった語義を示す。

<sup>5</sup> ここで degree modifier と認定されるのは、修飾する動詞と、*swithe* 本来の語義である ‘strongly, powerfully, violently’ の意味が調和的ではない場合である。

<sup>6</sup> Méndez-Naya (2003) では強意語を形容詞・副詞修飾に限定した上で、*swithe* の文法化を論じているため、強意用法の場合は degree modifier、動詞修飾の場合は manner adverb という呼称を用いている。

- (6) ac gegaderode his folc & ferde him togenes & *feaht*  
 and gathered his people & went him towards & fought  
*swyðe* ongean, oð ðæt he feol ofslagen, & his folc samod,  
 violently/very much against, until he fell killed & his people also  
 mid swurdes ecge.  
 with of-sword edge.

(QO3\_XX\_OLDT\_AELFOLD, XVIII: 1; from Méndez-Naya 2003: 381)

また、*OED* では1175年頃が初出とされている ‘rapidly, quickly’ の意味であるが、Méndez-Naya (2003) ではOEの用例に *run*, *ride*, *turn*, *escape* などの移動動詞を修飾するものが10例あることが確認されている。こうした移動動詞を修飾する manner adverb としての用法から、‘rapidly, quickly’ の語義が副詞自体の意味へと定着する様子は、‘quickly’ の意味を持つ *hrædlice* と *swithe* が並列表現として現れる (7) の用例により示されている。

- (7) Gyf hy hwilcne mannan on þæm lande geseoð oðþe ongytað, þonne  
 if they any man in the land see or discover, then  
 nymað hy hyra earan him on hand & fleoð *swyðe*, swa *hrælice*  
 take they their ears them in hand & fly away quickly as quickly  
 swa is wen þæt hy fleogen.  
 as is supposed that they may-fly away.

(QO2/3\_NI\_GEO\_MARV: 62; from Méndez-Naya 2003: 383)

このように、Méndez-Naya (2003) の調査および *OED* の初出例に基づくと、*swithe* はOEの段階で、本来の ‘strongly, violently, severely’ といった意味から、強意副詞の用法を発達させ、多様な動詞との共起を可能にした。そして移動動詞との共起から、やがて ‘quickly’ の語義が副詞に定着したことが分かる。現代英語においては、*swithe* の場合は方言や古語として使用される稀な副詞となったが、歴史的な意味変化をみると、*fast* と時代は異なるものの、強意語から ‘rapidly/quickly’ といった「迅速」の意味を発達させるといふ変化のパターンは共通している。

## 2.2. *fast* の意味変化

本項では、Table 2 で *OED* の各語義の初出年を参照しながら *fast* の通時的意味変化を概観する。<sup>7</sup>

<sup>7</sup> Table 2 では副詞 *fast* の *OED* における主要な語義を引用し、周辺の判断したものは省略した。

*fast* は原義が固定や不動の概念を表す ‘firmly/fixedly’ の意味であったが、物理的状況のみならず精神的態度の修飾にも用いられるようになり、ME では強意副詞として多種多様な動詞と共に起るようになった。そして現代英語において一般的な ‘rapidly/quickly’ の語義は ME で新たに現れた意味であることがわかる。1275 年ではこの物理的な運動の速度を表す ‘rapidly’ の語義と、空間的近接を表す ‘close’ の二つの新たな意味が派生した。また 1300 年以前に ‘at once, immediately’ とした時間的近接の意味が生まれ、*as fast as* という連語表現が、‘as soon as’ の意味であったことが説明されている。強意用法は *OED* では第一義の c, d にあたる。

- (8) †c. Expressing fixity of attention, effort, or purpose: Earnestly, steadily, diligently, zealously.
- (9) †d. Expressing vigour in action: Stoutly, strongly, vigorously. *Obs.*

最終引用例の年代から、17c 頃までこの強意用法が用いられていたことが確認できる。現代では廃用となった強意用法であるが、ME の文学作品を対象に行った調査では、*pray fast* (心から祈る)、*fight fast* (激しく戦う) といった強意用法が頻繁に見受けられる。

Table 2: *OED*, s.v. *fast*

c888 -1850	2. a. With firm grasp, attachment, or adhesion; so as not to permit of escape or detachment; tightly, securely. Often with <i>bind, hold</i> , etc.
c900 -1879	1. a. In a fast manner, so as not to be moved or shaken; <i>lit.</i> and <i>fig.</i> ; firmly, fixedly. Often with <i>stand, sit, stick</i> , etc.
c1200 -1844	1. b. <i>to sleep fast</i> : to sleep soundly.
?c1200 -1644	1. †c. Expressing fixity of attention, effort, or purpose: Earnestly, steadily, diligently, zealously.
c1275 -1854	3. In a close-fitting manner; so as to leave no opening or outlet. Often with additional notion of security.
c1275 -1869	4. a. Of proximity; <i>lit.</i> and <i>fig.</i> Close, hard; very near. Now only in <i>fast beside, fast by</i> (arch. or poet.)
c1275 -1893	6. a. Quickly, rapidly, swiftly.
c1297 -1570	1. †d. Expressing vigour in action: Stoutly, strongly, vigorously. <i>Obs.</i>

a1300 -1782	† 5. Closely, at once, immediately. <i>as fast as</i> : as soon as (cf. 6). <i>as fast</i> : as fast as might be, very quickly, straightway, immediately. <i>Obs.</i>
----------------	---

*The Canterbury Tales* では本来の ‘firmly’ の語義よりも強意副詞として分類できる用例が多い。*fast* が用いられた全 75 例のうち、「固定」の意味が 10 例、「強意」と判断されるものが 31 例、「速く」が 18 例、「近く」という空間的近接の意味が 10 例、「すぐに」などの時間的近接の意味が 6 例であった。(10), (11), (12) の用例から、「迅速」の意味が副詞独自の語義として定着する前の段階として、強意用法と「迅速」の意味がどのように使用されているかを見る。

- (10) He kiste hire sweete and taketh his sawtrie,  
He kissed her sweetly and takes his psaltery,  
And pleyeth *faste*, and maketh melodie.  
And plays fast, and makes melody.

(*The Canterbury Tales* Mil. 3305-6)

- (11) And after that men daunce and drynken *faste*,  
And after that men dance and drink deeply,

(*The Canterbury Tales* Mch. 1769)

- (12) And spede yow *faste*, for I wole abyde  
And hurry yourself, for I will wait  
Til that ye slepe *faste* by my syde.”  
Until you sleep fast by my side.”

(*The Canterbury Tales* Mch. 1927-8)

(10) では、*play* を修飾し、「心をこめてメロディーを奏でる」といった意味で用いられ、本来の固定・不動の意味から心的な強意を表している。(11) では、*dance* と *drink* 双方の動詞を修飾しているとも考えられるが、この用例も ME で頻繁に表れる強意用法である。(12) では、二行連続で *fast* が使用されている。1927 行では動詞 *speden* (to hasten) を修飾し、動詞の意味に迅速の概念が含まれるため、「速くする、急ぐ」といった意味に解釈できる。この段階では、*fast* 単体の意味として ‘rapidly/quickly’ の語義があるというよりも、強意副詞の意味側面が強い。なぜなら ME の文学作品を用いた調査では、*fast* が単独で ‘rapidly’ の意味を表す用例が確認できないからである。しかし、この 1927 行の例のように様態に「迅速」の意味を含む動詞や、移動動詞と共起する例は多く、こうした用例から徐々に ‘rapidly’ の語義が *fast* という副詞自体の語義として定着していったこ

とがわかる。1928 行も強意用法であり ‘sleep soundly’ といった語義で解釈できる。*sleep fast* は現代英語にも残るイディオム表現となったが、ME での生起数と *MED* を参照する限り、この時代では強意用法の一つであった。

### 3. 強意副詞としての *swithe* と *fast*<sup>8</sup>

Mustanoja (1960) は “degree adverbs” の項において、強意副詞を “intensifying adverbs” と “weakening adverbs” の二つのカテゴリーに分け、38 語の強意副詞をあげている。Quirk et al. (1985) 同様、ここでは意味性質によって強意副詞の選定が行われ、修飾対象の規定はなく、*swithe* と *fast* は以下のように説明されている。

- (13) ‘SWITHE (SWITHELY).’ — From OE *swipe* ‘strong.’ In the meaning ‘extremely, much, very’ this adverb is the most popular intensifier of adjectives, adverbs, and verbs in OE and early ME. ... *swipe* begins to give way to other intensifying adverbs, notably *full*, *well*, and *right*, in connection with adjectives and adverbs, and to *much* and *greatly* in connection with verbs. In the second half of the 14th century *swithe* is only occasionally found, and after 1450 it is no longer recorded as an intensifying adverb.

(Mustanoja 1960: 325)

- (14) ‘FAST (E).’ — The original meaning of this adverb is ‘immovably, firmly.’ In many cases its original modal function passes into an intensifying use, as in *fast asleep* and *fast by* (e.g., *the Tabard faste by the Belle*, Ch. CT A Prol. 719), and in conjunction with verbs (*she faste Ay biddyng in hire orisons ful faste*, Ch. CT G SN 140).

(Mustanoja 1960: 318)

*swithe* は本来の ‘strong’ といった語義から、強意用法が発達し、‘extremely, very much, very’ の意味で用いられるようになった。OE から EME にかけて形容詞、副詞、動詞を修飾する最も一般的な強意語であったが、次第に形容詞・副詞修飾の場合は *full*, *well*, *right*、動詞修飾の場合は *much*, *greatly* などに取って代わられたことが述べられている。*fast* の場合は、本来の ‘immovably, firmly’ といった様態を表す意味から強意用法への展開が示唆されている。

*OED*, *MED* においても強意語の意味説明はそれぞれ異なっている。*Historical Thesaurus of Oxford English Dictionary (HTOED)* で強意語のカテゴリーを調べると、536 語

<sup>8</sup> 本節の議論は小笠原 (2013: 27-30) に基づき、加筆・修正を行った。

が強意語としてあげられているが、*swithe* はここに含まれている一方で、*fast* はその中に属していない。これは *HTOED* が基づいている *OED* の語義記述に左右された結果であると考えられる。

(15) *OED*, s.v. *swithe*, adv.

† 1. Qualifying a finite verb or a participle: Strongly, forcibly; very greatly, very much, extremely, excessively; in *superl.* most, most especially.

† 2. Qualifying an adj. or adv.: Excessively, extremely, very. *Obs.*

(16) *OED*, s.v. *fast*, adv.

1. b. *to sleep fast*: to sleep soundly.

† c. Expressing fixity of attention, effort, or purpose: Earnestly, steadily, diligently, zealously.

† d. Expressing vigour in action: Stoutly, strongly, vigorously. *Obs.*

2. † b. *fig.* Of a command or prohibition: Strictly.

† c. Of defence or concealment: Securely. *Obs.*

*swithe* の場合は ‘very greatly/very much’ といった語義で説明されている。こうした一般的な強意表現が含まれることで、*HTOED* では強意語のカテゴリーに属していると考えられる。しかし、*fast* の ME における強意副詞としての用法は ‘earnestly, diligently’ といった語義で説明されており、*swithe* の項で用いられていた ‘very much’ などの表現では説明されていない。

*OED* では強意副詞と認定されていない印象をうける *fast* であるが、*MED* では以下のように *swithe* と同様、*fast* も強意語として説明されている。

(17) *MED* s.v. *swithe*, adv.1a

As an intensive or an adv. of degree modifying a finite verb or ppl. [the meaning is largely contextual, and the precise gloss is determined by the verb being modified]

(18) *MED* s.v. *faste*, adv. 9

As an intensive, with various verbs: (a) (strike stamp, knock) vigorously, hard; (b) (eat, sing, weep, play, talk, tell lies, argue) steadily, hard, much; (give) freely, much; (prosper) greatly; (c) (sleep) soundly; **ben faste on slepe (aslepe)**, be fast asleep; (d) (burn, rain, thunder, bleed) hard, much.

*OED* の語義区分では、‘earnestly, diligently’ は ‘firmly’ の語義の下位区分に属し、強意副詞として記述されていなかった。しかし、(18) のように、*MED* ではこうした心的強意

は、“as an intensive”と説明され、強意用法の一種に含められている。このように Mustanoja (1960) と *MED* では、*fast* は強意副詞として説明されており、実際の使用状況からも、*fast* が ME における強意副詞の一つであったことは明らかである。

#### 4. 共起動詞からみる *fast* の意味変化

##### 4.1. *Helsinki Corpus* の用例における共起動詞の観察

本項では、*HC* における共起動詞の観察を通して *fast* の ME から近代英語期 (EModE) にかけての支配的な意味の変動を見る。Table 3 では *HC* の M1 から E3 までの期間における *fast* を語義別に分類し、Figure 1 は各語義の頻度の変化を示している。<sup>9, 10</sup>

‘firmly’ と分類したものは、*hold*, *sit*, *stand*, *bind* などの *fast* との共起の結果、指し示される状態が固定・密着を表すようになるものである。‘rapidly/quickly’ に分類した用例は、二つの共起動詞のパターンがある。一つ目は、迅速の概念を含む *hien* (to go quickly) や *sheten* (to move swiftly) といった動詞との共起の結果、動詞の様態に含まれる「迅速」の意味をより強化していると考えられるパターンである。二つ目は、*rennen* (to run), *gon* (to go) など動詞の意味に迅速の様態が含まれなくても、強意副詞 *fast* との共起により「迅速」の意味が生まれるものである。また、‘as an intensive’ として分類した用例は、*hope*, *wonder* などの心理動詞によって表される心的態度を強めていると考えられるもの、また *eat*, *sleep*, *weep* などの動作動詞を *fast* が修飾することで、動作の強度や行為の連続性が示されるものである。‘close’ という意味に分類した用例は、*fast by*, *fast beside* といった連語表現で表れているものである。

*fast* の強意副詞としての用法は M2 では ‘firmly’ の語義に続き 2 番目に多い。M3 では最も頻度の高い語義は ‘rapidly’ へと移り変わり、強意用法も迅速の語義に続き高い頻度で現れている。強意副詞としての用例は M4 にかけて次第に減少し、E3 では消失してい

<sup>9</sup> *Helsinki Corpus* は OE から EModE までをカバーする通時コーパスであるが、総語数は約 160 万語であり現代英語のコーパスと比較すると規模の小さいコーパスである。また現存するテキスト数が少ないことにより、時代区分ごとに総語数にばらつきがある。こうした背景から得られるデータには偏りが生じることも大いに考えられる。特にグラフの振る舞いに関しては事実とは異なる点が強調されてしまう恐れがあることも考慮しなければならない。しかし、今回得られたデータによる意味変化の大きな流れには、同時代の文学作品にみられる使用状況とほぼ同様の様相が見受けられた。

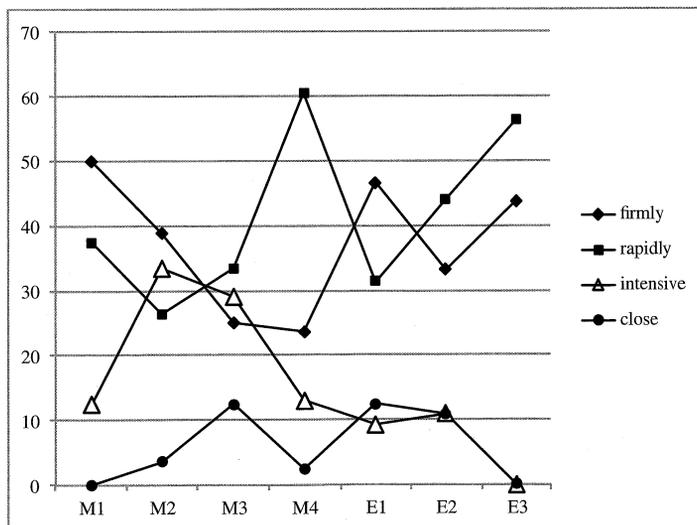
<sup>10</sup> *Helsinki Corpus* の統計については、次を参照。O1 (-850), 2,190 words; O2 (850-950), 92,050 words; O3 (950-1050), 251,630 words; O4 (1050-1150), 67,380 words; M1 (1150-1250), 113,010 words; M2 (1250-1350), 97,480 words; M3 (1350-1420), 184,230 words; M4 (1420-1500), 213,850 words; E1 (1500-1570), 190,160 words, E2 (1570-1640), 189,800 words; E3 (1640-1710), 171,040 words.

る。通時的に意味変化の動きを見ると、強意語としての用法はその他の‘close/soon’といった語義と共に近代英語にむけて衰退していく。これに対し、原義である‘firmly’はどの期間も一定の頻度を保ち、‘rapidly’の語義に関してはE3では*fast*の最も一般的な語義へと上りつめている。

Table 3: Semantic change of *fast*, Frequencies for the 4 different meanings (M1-E3)<sup>11</sup>

	firmly	rapidly/quickly	as an intensive	close	total (raw numbers)
M1	4	3	1		8
M2	21	15	19	2	57
M3	6	8	7	3	24
M4	9	23	5	1	38
E1	15	10	3	4	32
E2	3	4	1	1	9
E3	7	9			16

Figure 1



<sup>11</sup> Table 3, Figure 1 は小笠原 (2013) を改訂。

次に共起動詞の観察を行う。Table 4はHCにおける共起動詞を頻度順、時代別にリストしたものである。また、各項右側の数字は生起数となっている。動詞のタイプ数においてその数が最も多いのはM2の強意用法であり、*fast*は多種多様な動詞と共起している。*crien* (to cry), *slepen* (to sleep), *bispeken* (to speak out) などの動作動詞と共起し、その行為の連続性を表す例、また*fighten* (to fight), *defenden* (to defend) などの動詞の形態に対し、動作に強度を付与する働きをする例が多く確認できる。

Table 4: Modified Verbs and Collocations in *Helsinki Corpus* M1-E3

1. firmly		2. rapidly, quickly		3. as an intensive		
fasten	3	rennen	1	bilen	1	M1
holden	1	treden	1			
		wenden	1			
binden	7	drauen	3	bispeken	2	M2
holden	6	ginnen	2	crien	2	
setten	2	gon	2	slepen	2	
fasten	1	rennen	2	thristen	2	
henten	1	driven	1	amansen	1	
shitten	1	ffien	1	assail(l)en	1	
sitten	1	folwen	1	chiden	1	
stonden	1	helden	1	counseilen	1	
witien	1	hien	1	defenden	1	
		sheten	1	destroien	1	
				fighten	1	
				helden	1	
				leien	1	
				slen	1	
				witien	1	
binden	3	rennen	3	travailen	2	M3
bidden	1	comen	1	wondren	2	
beholden	1	drauen	1	froten	1	
sitten	1	gon	1	slepen	1	
		hasten	1	slouthen	1	
		riden	1			
shetten	3	as fast as	8	preien	2	M4
steken	2	meven	4	bleden	1	
binden	1	rennen	4	clateren	1	

cleven	1	comen	3	striken	1	
holden	1	gon	2			
roten	1	drauen	1			
		riden	1			
binden	4	as fast as	8	slepen	2	E1
holden	2	rennen	1	wepen	1	
loken	2	driven	1			
setten	2					
teien	2					
knitten	1					
shetten	1					
steken	1					
holden	2	as fastas	3	clappen	1	E2
steken	1	gon	1			
steken	3	as fast as	7			E3
holden	2	increase	1			
binden	1	ride	1			
tien	1					

この強意副詞として解釈できる心理動詞や動作の結果が固定・密着に繋がらない動作動詞はM2をピークに、E2まで表れているが、E3になると消失している。これと対照的な現象は、様態に迅速の概念を含む動詞、または*fast*と共起することで「迅速」の意味を表すようになる移動動詞のタイプがM3で増加したことである。

さらにM4からの*as fast as*のコロケーションの出現は、‘rapidly’の意味が*fast*に定着したことを最も鮮明に表している。このコロケーションはE3では7例あり、この時期では強意副詞として*fast*が機能していると考えられる用例が抽出されないことから、強意から迅速へと語義が変化したことがわかる。変化が最も少ない動詞のタイプは、*fast*が‘firmly’の語義に解釈できるものであり、*bind*、*hold*はどの時期にも現れ、‘firmly’は現代英語まで残る意味となった。

#### 4.2. 文学テキストの用例における共起動詞の観察 (14c-17c)

本項ではHCを用いた通時的調査を補強する目的で、MEからEModEにかけての主要な文学作品における*fast*の共起動詞をみる。ME作品については14c後半を代表するChaucerの*The Canterbury Tales*とGowerの*Confessio Amantis*を対象に、用例の分析をおこない、その共起動詞をTable 5にまとめた。Table 6では15c後半の言語使用状況として*The Works of Sir Thomas Malory*を対象とし、Table 7は16c~17cの用例として

Shakespeare の全戯曲とソネットを対象に共起動詞を抽出した。

Table 5 の ME の共起動詞をみると、‘firmly’ の項では、*holden* (to hold), *binden* (to bind), *shitten* (to shut) が比較的高頻度で現れている。また HC で現れた動詞と同様に、‘rapidly’ として分類した共起動詞には *speden* (to hasten), *hien* (to go quickly) 等の、動詞の様態に迅速の概念を含むものと、*gon* (to go) などの強意副詞 *fast* との共起により「迅速」の意味が現れる移動動詞がある。ここで文学作品の用例を通してより深く追究したい点は、強意用法に分類した動詞についてである。今回の調査では強意用法に分類した用例の中には、強意されることで「迅速」の意味が現れる動詞がある。以下の (19), (20) がその一例である。

(19) And on a wal this kyng his eyen caste

And on a wall this king cast his eyes

And saugh an hand, armlees, that wrootful *faste*,

And saw a hand, armless, that wrote very fast,

(*The Canterbury Tales* Mk. 2202-4)

(20) To hasten hem, and *faste* swepe and shake;

To hasten themselves, and fast sweep and dust;

(*The Canterbury Tales* Cl. 978-80)

(19) は、動詞 *wroot* (wrote) を修飾する例であるが、動作動詞には強意副詞によって修飾された場合、その動作の連続性を想起させるものがある。すると、「せっせと書く」、「さっさと書く」といった意味合いも生まれ、その動作全体の速度の速さが示されていく。(20) の用例では、*swepe* (sweep) と *shake* (dust) を修飾している。これらの「掃く」、「埃をはらう」などの動詞は、一見迅速の概念を含まないように見えるが、強意されると、動作の連続性が示され、迅速へと意味が拡張するものである。

次に Table 6 の 15 世紀後半の状況を確認する。まず ME と同様に、‘firmly’ の項では *hold*, *bind* などが高頻度に現れている。*The Works of Sir Thomas Malory* では、作品の特質も反映していると考えられるが、‘rapidly’ の意味に分類できる移動動詞や迅速の概念を含む動詞のタイプ数が多い。強意用法では、*bleed* が最も多く使用された動詞であったが、Malory 作品においても、まだ *cry* などの動作動詞との共起が見受けられる。

最後に Table 7 で近代英語における *fast* の共起動詞を見ていきたい。この時期には強意用法は見当たらないため、‘firmly’ と ‘rapidly’ の二つの語義に収斂したことが分かる。ME と比較すると、‘rapidly’ の語義で用いられる動詞のタイプが急激に増加している。*run*, *go*, *come* などの移動動詞も高頻度で現れてはいるものの、最も多く使用されていたのは *grow* であった。その他、*find*, *sing*, *sin*, *wane* 等、動詞の意味側面が副詞に影響を

及ぼしているのではなく、*fast* が単体で ‘rapidly’ の語義をもち、manner adverb として動詞を修飾する用例がほとんどであった。このことから、‘rapidly’ の語義が副詞自体に定着したことが共起動詞のタイプによって、より鮮明に示されている。

Table 5: Modified Verbs in *The Canterbury Tales* and *Confessio Amantis* (a.1393)

1. firmly		3. as an intensive			
holden	9	brennen	3	preien	1
binden	7	slepen	3	presseen	1
shitten	5	clateren	2	priken	1
stonden	3	coveiten	2	profren	1
stoppen	2	drinken	2	reinen	1
steken	2	sechen	2	riden	1
enclosen	1	speken	2	shaken	1
knitten	1	argumenten	2	slen	1
lien	1	avisen	1	sobben	1
sitten	1	bidden	1	swepen	1
taken	1	bisien	1	sweren	1
upholden	1	blouen	1	traveilen	1
2. rapidly, quickly		censen	1	wondren	1
speden	6	crien	1	writen	1
gon	6	fighten	1		
hien	3	fnesen	1		
flen	2	forbeden	1		
rennen	2	knoken	1		
hasten	2	laughen	1		
sliden	1	lien	1		
sterten	1	lullen	1		
wren	1	nodden	1		
		pleien	1		

Table 6: Modified Verbs in *The works of Sir Thomas Malory* (c.1422-1491)

1. firmly		2. rapidly, quickly		3. as an intensive	
bind	8	come	26	bleed	3
hold	5	ride	23	arm	1
behold	2	run	9	bay	1
stake	2	follow	7	cry	1

sit	2	go	7	fell	1
tie	2	fle	5	hew	1
fasten	1	hien	4	layon	1
made	1	chace	2	lete	1
press	1	seuen	2	pluck	1
sparde	1	avoyde	1	pray	1
		depart	1	smite	1
		drive	1	traveyle	1
		fecche	1		
		flingen	1		
		hurle	1		
		pass	1		
		pryke	1		
		rush	1		

Table 7: Modified Verbs in Shakespeare's Works (1564-1616)

1. firmly		2. rapidly, quickly			
stand	10	grow	6	give	1
bind	7	run	6	glide	1
hold	3	as f. as = as soon as	5	haste	1
sit	2	go	3	heal	1
wind	1	come	3	pace	1
have	1	fly	3	pelt	1
entrap	1	follow	3	ride	1
swear	1	breed	1	sin	1
		bring	1	sing	1
		come f. upon	1	speed	1
		cut	1	spur	1
		die	1	vent	1
		do	1	vie	1
		drop	1	wane	1
		fade	1	weep	1
		find	1	work	1

## 5. おわりに

本稿では、動詞修飾の事例に焦点をあて、強意副詞の通時的意味変化を共起動詞の観察から論じた。動詞修飾の働きを持つ強意副詞の振る舞いや意味変化については、強意語とは別に、様態副詞としてカテゴライズされることで、これまで詳細に論じられることはなかった。しかし、強意から迅速への意味変化は、*swithe* や *fast* など、本来 ‘strongly, firmly, vigorously’ などの意味で動作に強度を付与する働きのある副詞に内在的な性質と言える。

この意味変化には、二つの経緯が想定される。一つ目は、迅速の概念を含まない動詞であっても、強度が付与されることで、動作に連続性が生まれ、迅速へと意味が拡張する場合。二つ目は、速さのスケールが内包される動詞が強意副詞と共起すると、より速い状態が指し示される場合である。

強意副詞の意味変化については、本来の具体的語彙から強意語へという、具象から抽象の意味変化の流れが主張されてきたが、強意からさらに ‘rapidly’ という語彙の意味が定着するパターンがあるといえる。今後、今回検討した以外の副詞の通時的意味変化についても議論する必要があるが、強意副詞はおしなべて文法化・脱語彙化に終わることはなく、再び語彙的意味を定着させる意味変化の傾向がある事実を本稿では示した。

## 参考文献

- Allerton, David J. 1987. “English Intensifiers and their Idiosyncrasies.” In Ross Steele and Terry Threadgold (eds.) *Language Topics: Essays in Honour of Michael Halliday*, vol. 2, 15-31. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Bybee, Joan L., Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: University of Chicago Press.
- Klein, Henny. 1998. *Adverbs of Degree in Dutch and Related Languages*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Lorenz, Gunter. 2002. “Really Worthwhile or Not Really Significant? A Corpus-Based Approach to the Delexicalization and Grammaticalization of Intensifiers in Modern English.” In Ilse Wischer and Gabriele Diewald (eds.) *New Reflections on Grammaticalization*, 143-61. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Méndez-Naya, Belén. 2003. “Intensifiers and Grammaticalization: The Case of *Swipe*.” *English Studies* 84, 372-91.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Helsinki: Société Néophilologique.
- 小笠原清香. 2013. 「強意副詞の脱語彙化と語彙化——*swithe* と *fast* の場合——」『英米文学』(立

教大学) 73, 25-44.

- Partington, Alan. 1993. "Corpus Evidence of Language Change: The Case of Intensifiers." In Mona Baker, Gill Francis, and Elena Tognini-Bonelli (eds.) *Text and Technology: In Honour of John Sinclair*, 177-92. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Sinclair, John. 1992. "Trust the Text: The Implications are Daunting." In Martin Davies and Louise Ravelli (eds.) *Advances in Systemic Linguistics*, 5-19. London: Pinter.
- Stern, Gustaf. 1921. *Swift, Swiftly, and their Synonyms. A Contribution to Semantic Analysis and Theory*. Göteborg: Elandersboktr.
- Stern, Gustaf. 1975 [1931]. *Meaning and Change of Meaning: With Special Reference to the English Language*. Wesport, Conn: Greenwood.
- Traugott, Elizabeth C. and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

#### 辞書・コーパス

- Kay, Christian, Jane Roberts, Michael Samuels, and Irené Wotherspoon (eds.) 2009. *Historical Thesaurus of the Oxford English Dictionary: With Additional Material from a Thesaurus of Old English*. 2 vols. New York: Oxford University Press.
- MED = Kurath, Hans and Sherman M. Kuhn et al. (eds.) 1952-2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor, MI: University of Michigan Press. Online version: <http://quod.lib.umich.edu/m/med/>
- OED = *Oxford English dictionary*, 2nd edn. 1989. Oxford: Oxford University Press. Online version with revisions: [www.oed.com](http://www.oed.com)
- Rissanen, Matti, et al. (eds.) 1991. *Helsinki Corpus of English Texts: Diachronic and Dialectal*. CD-ROM. Helsinki: Department of English, University of Helsinki.

#### テキスト

- Benson, Larry D. (ed.) 1998. *The Riverside Chaucer*. 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Blakemore G. Evans (ed.) 1974. *The Riverside Shakespeare*. Boston: Houghton Mifflin.
- Macaulay, G. C. 1900-1901. *The English Works of John Gower*. London: Published for the EETS.
- Vinaver, Eugène (ed.) 1967. *The Works of Sir Thomas Malory*. 2nd ed. 3 vols. Oxford: Clarendon.